

# 甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2014

2号

松丘保養園の機関誌



## ソメイヨシノ

サクラと言えば「ソメイヨシノ」と言われるほど日本全国の桜前線の基準ともなっている木です。日本の桜で「ソメイヨシノ」の割合は実に約八〇九割と言われております。サクラの品種が三〇〇種以上あるにもかかわらずこの木が愛されてきたのは、花を一斉に咲かせ、そして一斉に散る潔さが日本人の心をつかんだのかもしれない。

「ソメイヨシノ」は「大島桜」と「江戸彼岸桜」を掛け合わせて作られた雑種です。

江戸時代の末期に染井村（現在の東京都豊島区巣鴨）の植木職人 伊藤 伊兵衛が作ったと言われております。

又、「ソメイヨシノ」は雑

種の為、種で子孫を残すことができません。その為、挿し木により増やされてきました。現在、全国に植えられている「ソメイヨシノ」のすべては一本の個体を分身させて作ったクローンです。みんな同じ遺伝子なので同じ環境ならば一斉に咲き一斉に散ります。然るに「ソメイヨシノ」はどんな若い芽でも一五〇歳以上は年を重ねていることとなります。しかし、樹木の命は永遠ではないのでいずれ「ソメイヨシノ」が見られない時代も訪れるのかもしれないかもしれません。

今年もこの松丘保養園にサクラが咲きました。

華麗に咲き、散っていくサクラ、心苦しいまでのその美しい姿に心が躍ります。

（樹木医 逢坂 淳）

---

甲田の裾 平成26年2号 目次

---

ご挨拶	副園長 江谷 勉	… 2
よろしく申し上げます	外科医長 清藤 大	… 6
新任の挨拶	事務長 菅 政彦	… 8
お久しぶりでございます	総看護師長 天内 文子	… 10
林の向こう側へ	新城中学校教諭 古川 英麻	… 12
随想 <small>いちもくいつそう</small> 一木一草あれやこれや	滝田 十和男	… 17
記憶をたどって	木村 伯龍	… 23
短歌 白樺短歌会		… 26
再出発原点	三浦 喜美子	… 28
松丘のニューフェイス紹介		… 32
川柳・俳句	木村 伯龍	… 34
野の花の微笑み(9)	比良 信治	… 35
自治会日誌		… 42
編集後記・人事異動		… 43

表紙写真 「2014さくら」叶 順次  
写真提供 叶 順次・福祉室

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号～)は  
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ  
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>



## ご挨拶

副園長 江谷 勉

入所者のみなさま、はじめまして。四月一日付けで副園長として着任しました江谷勉（えたとにつとむ）と申します。松丘保養園の一員として甲田の裾で挨拶させていただけることをたいへん誇りに思います。

私の出身は兵庫県豊岡市という山陰地方の小さな町です。志賀直哉の「城崎にて」の舞台である城崎温泉があり、「コウノトリの町」といえばご存知の方もおられるかもしれません。大学進学を機に岡山に出て、人生の半分以上は瀬戸内で過ごしてきました。前任地は当園の友園である国立療養所長島愛生園です。長島愛生園には十二年の長きに渡りお世話になりました。正直に言いますと「ハンセン病医学」に情熱があったから愛生園で長く勤務できた訳ではありません。そういう意味ではハンセン病療養所のために尽力されてきた先輩の先生方の足下にも及びません。ただ、日々眺める瀬戸内の美しい景色や療養所に住む入所者のみなさん、そこに流れる雰囲気がとても好きだったからです。その中で子育てをしながら、のんびりと勤務させていただきまし



個人的には、これまで松丘保養園との繋がりはありませんでした。松丘に初めて来たのは昨年の九月です。川西健登園長からのご依頼で当園の外来を少し手伝ったのが事の始まりです。その際には園内の木々の立派さ、緑の濃さに驚きました。また時間を作って訪ねた八甲田山や奥入瀬にも感動しました。赴任前には岡山で「青森は寒いところだから大変だ」とたくさんの方から心配していただいたのですが、今のところ私自身はそんなことを思ったことはなく「青森は自然が豊かで食べ物も美味しく、いいところ」というのが第一印象です。「本格的な雪を知らずに」と笑われるかもしれませんが、また、保養園が交通・生活ともにたいへん便利がよく、恵まれた立地条件にあることには驚きました。

生活が「海を見ながら」から「木々に囲まれて」に変わりました。これからの新緑の季節を心待ちにしています。瀬戸内とは違った四季を経験することが私には大切な経験になってゆくと思います。

松丘保養園でお世話になると決まってから、いつも心の中に感じてきたことがあります。私はこれまで東北地方にはまったく縁がない人生を歩んできました。それが今回、松丘でお世話になることになったのは「偶然ではなかった」という想いです。私の東北地方とのお縁は東日本大震災に始まります。震災の際には、岡山県医師会の救護班の一員として宮城県石巻市で活動をさせていただきました。後で考えてみればそれが人生で初めての東北でした。その後、岡山県医師会の被災地支援プロジェクト代表を務めさせていただき、二〇一二年の秋までに四回ほど石巻市で活動させていただきました。そうしているうちに、すっかり東北が好きになっていました。それを知る

人は今回の青森転勤を聞くと、「医師会の仕事の関係で行かれるのですか」と聞いてこられます。実際には今回の異動とはまったく関係なく、単なる偶然です。でも、ここ三年、東北地方にたびたび足が向いたことは事実であり、そこに偶然以外の何らかの力を感じます。こういうのをお導きとかご縁というのでしょうか。

松丘保養園でお世話になるにあたり私にできることは何か。自分の長所は状況を変える突破力、チームを束ねる調整力と忍耐強さだと思っています。入所者のみなさんや職員との対話を大切にし、みなさんの声に耳を傾け、みなさんの力をお借りしながらチームワークでよりよい療養環境作りができるように努力したいと思います。チームワークが良ければ、一足す一は二以上の力になると信じています。

青森県は短命県と呼ばれています。しかし、松丘保養園の入所者の平均年齢は他の療養所と比べても遜色ありません。それは松丘保養園の医療が現状で全国水準に達している証拠です。それをもう一歩進め、入所者のみなさんがより穏やかな気持ちで暮らしていただけるようにするために、医療を中心とした療養環境の質の向上に取り組みたいと思います。

また、療養所の大切な使命にハンセン病問題の啓発や入所者の人権回復があります。過去の歴史を正しく社会に伝え、入所者の人権回復のために努力するのが療養所職員の大切な責務であることは言うまでもありません。一方で、その歴史の中にも入所者のみなさんの「喜び」や「笑い」、「幸せ」が存在するはずで、ハンセン病療養所に長く勤務した経験から、過去の苦難だけでなく、みなさんの人生の明るい面にもたくさん光を当てたいというのが私の願いです。

まだ若輩者ですので躓くことも多いと思います。万一、転んでしまった時には東北人の忍耐でお許しください。そんな時には初心を忘れず、謙虚に、焦らずに進みます。最後に、青森行きを許していただいた長島愛生園の入所者のみなさんの今後のご多幸を祈ります。そして、温かく迎えていただいた松丘保養園の入所者、職員のみなさん、機会を与えていただいた川西健登園長には心から御礼申し上げます。

えたに つとむ

兵庫県豊岡市出身

誕生日：昭和39年6月4日（辰年）

身長180cm、体重70kg、眼鏡あり。血液型A型

平成2年～ 岡山大学医学部 麻醉科・蘇生科

平成4年～ 岡山大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸外科

家族：妻、長女（高3）、次女（中1）の4人家族

趣味：四国での荒磯釣り



よろしくお願いします

外科医長 清藤 大

弘大医学部卒業後に癌免疫療法の研究で米国留学から帰国した二十年前に松丘保養園の話が来て一度勤務しました。三上賛鷹園長、福西征子園長時代でその後大学に戻って助手を経て外へ出てからは一貫して地域医療に携わって来ました。

藤崎病院、蟹田病院、鰺ヶ沢病院と移り、鰺ヶ沢には最も長い十二年間勤務しました。鰺ヶ沢病院では外科手術以外に当初消化器内科医不在のため外科で消化器内視鏡検査も多く経験してきました。しかしながら、約一年前から体調を崩して次々と病気を発症して治療しましたが、腎機能の悪化により遂には昨年末に大分大学病院に入院しました。退院しましたが慢性腎不全でいつ死んでもおかしくない状態と言われて未だ体調は回復せず、これまでの仕事を続けることが出来なくなりました。今後も病気の治療を続けながら仕事が出来る場所を考えたいところ、以前にお世話になった松丘保養園のことが頭に浮かびました。人間万事塞翁が馬でこれからの人生を前向きに考えて、命を大切に生きていきたいと思っています。



松丘保養園の桜の木は弘前公園に劣らず太く立派に成長し、何より新幹線が通って新青森駅や周辺地区の開発が目覚ましく、二十年の年月の長さを感じます。二十年振りに松丘保養園に戻って入所者の方や以前から勤務している看護師さんの中にも覚えている人がおり、昔のことが懐かしく思い出されます。これまでの知識や臨床経験を活かして十分お役に立てられることがあると思いますので、これからよろしくお願い致します。

せいとう だい

昭和35年弘前市生まれ（二人兄弟の長男）、弘前高校卒業、弘前大学医学部卒業、卒業後二外科（現消化器外科）入局、青森市民病院外科で初期研修、函館市立病院外科、アメリカ留学（テキサス大学ヒューストンM・D・アンダーソンがんセンターで糖免疫治療研究）、帰国後松丘保養園勤務、弘前大学医学部助手、藤崎病院外科、蟹田病院（現外ヶ浜病院）外科、鱈ヶ沢病院外科（12年間）勤務を経て現在に至る。

家族：母と弟（放射線技師）

趣味：映画、音楽鑑賞、PC関係



## 新任の挨拶

事務長 菅 政彦

この度、四月一日付をもちまして、当国立療養所松丘保養園に異動になりました菅政彦と申します。どうかよろしくお願い申し上げます。

私の出身は、秋田県南部に位置しております「湯沢市」です。平安期の「小野小町」の誕生の地と言われ、岩谷洞などの史跡や伝承が守り継がれています。全国的には、スキー場がある新潟県の「湯沢町」が有名でないかと思っております。豪雪地域で、青森市と同じくらい雪が降ります。子供のころは、スキー、かまくらなど雪に親しんでおりました。また、湯沢市はお酒と温泉が有名であり、私自身温泉は好きなのですが、お酒は全然飲めません。

昭和五十年に国立釜石療養所に採用となり、その後、国立療養所青森病院、国立療養所岩木病院、国立療養所秋田病院、国立療養所岩手病院、国立療養所南花巻病院、国立病院機構八戸病院に勤務し、北東北三県の施設勤務をしてきました。これまで国立病院機構の制度の中で仕事を行ってきましたので、今回、十年ぶりに国の制度である財政法、会計法、予決令など昔のことを思い出しながら仕事をしております。

私と松丘保養園の関わりは、昭和五十二年の豪雪のとき、木造の松丘会館が倒壊し

ました。その時、東北管内の病院から除雪の応援がありました。その中の一人として一週間園内の除雪をした思い出があります。当時と比べれば園内の環境も大きく変わり大変驚いております。福祉棟前には、屋根付きの中央通り渡り廊下が整備され、中央センター等から雪道を歩くことなく福祉棟や管理治療棟に來られるようになり、また融雪道路が整備され保養園の環境は特段に良くなっている感じがしました。

このたび、「甲田の裾」の寄稿依頼がありましたので、二〇一四年新春一号を読ませて頂きました。私はハンセン療養所勤務がはじめてであり、このなかで、川西園長が年頭所感で書かれておられました。が、「入所者の立場に立つた福祉・介護・看護・医療サービスの向上」を図られるとの松丘保養園の運営方針を示しております。

また、ハンセン病に関する地域社会への啓発、教育、交流の重要性を記しており、これらは、平成二十六年年度国立療養所松丘保養園の組織目標として、職員へ周知しているところであり、当園のミッションとなっております。

平成二十年六月に「ハンセン病問題解決の促進に関する法律」が制定され平成二十一年四月一日から施行され、ハンセン病に対する社会情勢も大きく変わりました。あらためて勉強をしなければならないと考えております。

最後に、当園の基本理念「入所者一人ひとりが歩んできた道のりと生命の尊さを深く認識し、地域の人々と共に歩む、豊かな心安らかな療養環境の提供」とあるとおり、入所者の実情に応じた松丘保養園の運営・管理の適切な実施と入所者へのサービスの向上に勤めて参りたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。



## お久しぶりでございます

総看護師長 天内文子

四月一日付け人事異動で、独立行政法人国立病院機構八戸病院副総看護師長より、松丘保養園総看護師長に昇任しました。天内文子と申します。十五年振りに保養園に戻ってきました。入所者の皆様、お久しぶりでございます。

私、生まれは東津軽郡平舘村、一歳から青森市で育ち、県外に出たことのない、津軽娘です。昭和五十六年四月、青森県立青森高等看護学院を卒業し保養園が最初の勤務施設でした。バス停から保養園に向かう道路沿いの桜のつぼみが次第に膨らみ、満開の桜の下を歩いて通勤したことが思い出されます（昨年、樹木医による手入れが行われたので満開の桜を期待しています）。当時「本館」と呼ばれる建物の会議室に通され荒川園長先生より辞令を受け病棟配置となりました。自分の親より年上の先輩看護師に指導を受け、泣いたり笑つたりの毎日でした。医療環境も衛生材料や物品が整っているとは言えず、再生ガレヂや再生包帯を使って看護をしたこともありました。今では考えられません。入所者の方も五百人を超えていて、果物や野菜を作つたり、花を育てたりして、治療棟へも自分で歩いてこられる方がたくさんおられました。入所者の皆さんもお元気でした。

病棟に勤務して、後遺症が著しい患者さん（M・Oさん）に接したとき、二十一歳の私は驚きました。しかし、その方と接していくうちに人としての生き方を学ぶことができ、

私に看護とはなにかを教えてくださいました最初の患者さんです。その後十八年間、看護師、副看護師長として勤務し、浪岡の岩木病院（現在の青森病院）に看護師長で昇任することになり、保養園を去りました。青森病院は筋ジストロフィーの患者さんの病棟に六年、次に弘前病院に転勤し、呼吸器病棟に三年、リスクマネージャーとして三年勤務し、八戸病院に副総看護師長として昇任し二年過ぎました。段々と通勤距離が長くなり、青森は往復五十km、弘前は往復百km、八戸は新幹線通勤となり、朝早く夜遅い勤務を続けてきました。今は身体的にも楽になり、安全運転で通勤しています。

十五年という年月は保養園を取り巻く環境を大きく変えていました。施設整備が進み、療養環境が整っていることにうれしさと驚きを感じました。また、医療に関しても入院委託治療や通院委託治療の受け入れ病院が多く、高度・専門治療を受けることができる体制が整っており、高齢化し、様々な疾患を抱える入所者の方々にとつて大変良い環境になっておりました。地域との交流も、青森市新城中学校の生徒さんによる吹奏楽演奏や剣道の形見せ、クリーン運動や観桜会・納涼祭りに近隣の町内会の皆さんが多数参加していることなど地域との交流の広がりを大変うれしく思います。

私も年齢を重ねましたが、入所者の皆さんの平均年齢をお聞きし、看護、介護の重要性を痛感いたしました。偏見と間違つた隔離政策により生きてこられた入所者の皆さんに対し今私たちが行える最善の医療・看護・介護を提供していくために、チーム医療の要として看護課の職員が一丸となつて進んでいけるよう、微力ながらがんばっていきたいと思います。

## 林の向こう側へ

青森市立新城中学校 教諭 古川英麻

「林の向こう側には何があるのだろうか？」

高くて、うつそうと茂った林。昨年、新城中に赴任した私には、林に囲まれた松丘保養園は、近くて遠い場所に感じました。社会科教員として、どのような所か多少知識があるという程度で、実際に接する時には、どう対応すればよいのかと身構えてしまう気持ちがありました。そんな私と保養園の方々との出会いは、九月に行われた職場体験学習でした。生徒の巡回のために訪れたときの印象は、明るくてきれいな施設だということだけで、実際に入所者の方とお話する機会はありませんでした。次の出会いは新城中でのボランティア集会で、保養園の方々の案内係として、実際にお話する機会がありました。白樺美術館の作品を案内しているうちに美術や、文芸作品に関して造詣の深い

方々だと感じ、また機会があつたらお話をお伺いたいと思つていました。その後、青森市の社会科教員が参加している学習会で、「ハンセン病と人権」という、元新城中学校教諭であつた佐藤先生の授業実践に出会いました。この授業は、ハンセン病を正しく理解し、その歴史を学んでいくことで、差別と偏見を無くしていきたいというものでした。その時の学習会では、なかなかハンセン病と、保養園について知る機会が少ないので、これからも勉強していこうという話になりました。

そして今年の一月、私が社会科教員の研究発表会で青森市を題材とした授業実践を行うことになり、学習会で紹介された授業実践の中から選んで授業をするという時に思い浮かんだのが、「ハンセン病と人権」でした。それを題材として選んだ理由



の一つは、まず保養園について、隣にある新城中が、授業しなくてどうするんだという気持ちがあったこと。二つ目の理由として、佐藤先生の授業は、約三年前のものであり、授業の結末部分が「これから機会があったら保養園の方々と交流をもつてみよう」というものだったのですが、この授業当時に比べて、今では職業体験や、ボランティア訪問など通じて、新城中と保養園は交流が盛んになっており、今後も共生の道を歩んでいけるのではないかと思つたからです。そのために、まずはハンセン病に対する正しい知識と歴史を教えるべきなのではと思つたのです。

佐藤先生の授業通りにやれば良かったのですが、二つ目の理由から、授業のまとめ部分を変更することになり、また、授業の準備のために調べていくうちに、保養園の方のインタビューが必要であると考へたので、保養園に年明けの忙しい中、取材の申し込みをしました。

ボランティア集会の時に、少しお話をしたことがあるものの、園長先生に会うときに、どう話したらよいだろうか？授業として、再び保養園を取り上げ

ることで、御迷惑をかけたかもしれないだろうか？様々なことを考えていくうちに緊張してしまい、実際に取材を申し込む時も私は、ずっと緊張していたので、その様子から私は変な人と思われたかもしれせん。

園長先生と相談しながら授業のインタビューを作り上げるといふ取材体験は、とても貴重な体験でした。ものすごく緊張していた私も、園長先生のととても穏やかな優しい話し方に、次第に自然な形でお話しを伺うことができるようになり、やがて、もつとお話しをしたい、もつと知りたいと思うようになくなりました。ただインタビューをするだけではなく、園長先生からも、資料提供や提案があり、とてもありがたく思いました。保養園とハンセン病について、もつと知ってほしいという保養園の方々の思いをしつかりと伝えなくてはと思いました。入所者の方へのインタビューでは、長時間お話を伺いしてしまつて、御迷惑をかけたましたが、入所者の方の人生を語るその言葉の一言一言が、胸に刺さっていく感じがして、ただのインタビューに終わらせたくないと思いました。

一週間ほどの取材期間を経て、一月十七日、研究授業を公開しました。研究授業は、一クラスだけ発表すれば良かったのですが、他のクラスの生徒達にも教えたいと思ったので、他のクラスでも授業をしました。

取材する中で、保養園の方々をはじめ、全国のハンセン病の元患者さん達は、高齢化が進み、今までの歴史や問題を実際に伝えることが難しくなっていることがわかりました。だから少しでも多くの次の世代に、今のうちに正しく伝えていく必要があるのではないかと思つたのです。

窓の外を指さして、

「この林の向こう側には何と言う施設があるの？」  
授業の最初の発問はこれでした。最初は、保養園の写真を見せようかと思つたのですが、隣で暮らす人々に対し、生徒はどのような関心を持っているのかをみるために、あえてこのような発問にしました。  
「えーなんだっけ？」

「老人介護施設。」

「病院みたいなの。」

半分は、わからない様子。何人かボランティア訪問

や、職場体験学習に参加した生徒が、

「松丘保養園。」

と答えてくれました。ただ、

「どんな施設なの？」

との質問に、

「あれ？なんとか病、あ、ハンセン病だったかな？  
の人がいる施設だと思えます…。」

と、ようやくハンセン病の名前が出てくるといった感じで、あまり自信がなさそうな答えが返ってきた。やはり隣で暮らしていても、よくわからないことが、生徒にもたくさんあるのだろうと思い、この授業をすることで、少しでも知ってもらえれば：とやりがいを感じた授業のスタートでした。

その後、ハンセン病の正しい知識、歴史を印刷資料で学びました。はじめのうちはハンセン病の症状などについて、ざわつくこともありましたが、差別や偏見があったことを書いた年表や、全国の元患者さん達の手記を読んでいくにつれて、生徒達にも真剣さが増していきました。しかし、印刷資料よりも、生徒の心に深く入り込んでいったのは、保養園で取材して得た、成瀬テルさんや、入所者の方の体

験談、園長先生のビデオメッセージだったと思います。  
す。

成瀬豊さんの奥様であるテルさんの体験談を、

成瀬豊さんの「叫び」とテルさんの写真とともに聞かせました。テルさんが、生徒達と同じ年頃の時にハンセン病を発症し、そのために学校に行けなくなつたこと、家の中で、じつと息を潜めて生活しなければいけなかつたこと、そして親と一緒に死ぬか？と言われたこと…。生徒も重みのある言葉の数々に真剣に聞き入り、「ひどいなあ。」「そんなのかわいそうだ。」「どうして？」などの言葉を口にしていました。授業で使用したものは取材したもの、ほんの一部であり、成瀬さんや、入所者の方の体験談から、まだまだ伝えたいことがたくさんあり、一時間の授業では、まだまだ足りないくらいでした。

特に授業のまとめの部分で見せた園長先生の新生生に対するビデオメッセージは、他者を思いやる気持ちをお大切にするという点で授業以外の生徒にも見せたいと強く思いました。

授業後、感想をみんな熱心に書いてくれました。

感想を書くことが苦手な生徒も、用紙いっぱい書いてくれて、生徒にも授業への思いが伝わったかなと思いました。

授業後、お礼に行くと、取材協力をしていただいた入所者の方が、保養園の七十周年記念誌を貸してくれました。保養園の方々の歴史や苦勞が、様々な視点から描かれていて、じっくり見入ってしまいました。文芸活動が盛んであつた話、新城村の人々との交流の様子。プロミンの石館先生の話、昔の保養園での大変な生活の様子に思わず涙が出ました。また、私が幼い頃に松木屋で見た植木市が保養園と関係のあるものだったことなど、取材で知りたかつたことが、たくさん書かれていて、本当にためになり、この本を題材に、また授業をしてみたいと思います。

新城中学校では、現在、多目的ホールに白樺美術館を開館しています。そこには、すばらしい芸術作品が飾られており、成瀬豊さんの作品もあります。定期的に合唱と吹奏楽のコンサートを開いており、私も鑑賞したのですが、その時、美しいフルートの音色と作品の向こうの窓には、保養園の

高い林が見え、きれいな絵のようになっていました。その林は、美術館の借景となり、なくてはならない美術館の一部となっていると思いました。私は、この風景を見ながら、今でも林の向こう側へ抜けて、保養園の方々と出会えたこと、知ったことを（まだまだ知らないことも多いのですが、）これからも大切にしていきたいと思っています。

お忙しい中、取材協力してくださりました川西園長先生をはじめ職員の皆様、入所者の方々、本当にお世話になりました。貴重な経験をありがとうございます。

### こがわ えま

平成25年4月より、新城中学校に社会科教諭として赴任。

25年9月に職場体験の巡回で初めて来園。  
26年1月の社会科教員の研究発表会のため、入園者の部屋を何度も訪れ、交流を深めている。



成瀬さんの話を聞く生徒達

## 随 想

### いちもくいつそう 一木一草あれやこれや

滝 田 十和男

「甲田の裾」の前々号に、松丘保養園のさくらの成育状況の調査を依頼された樹木医の方が、専門的立場から見た概況を報告されていたが、青森市内でも貴重な、松丘のさくらの古木に対する、やさしい眼差しが感じられて、ふだん見慣れていて何気なく思っていた樹々たちの存在が、あの報告によって、あらためて、これは大変な事なんだなと、気付かされたのは私ばかりではあるまいと思う。

松丘保養園要覧によれば、松丘の敷地は二三〇、五四八平方米で、むかしふうに表記すれば、六万九千八百六十三坪であるという。この敷地を広いと見るか、狭いとみるか、人それぞれに見方、感じ方が異なると思うが、単に敷地の面積だけを言々するのでなく、その置かれた立地の環境によって、

そこに住む人々の生活の趣むきが左右されることは、言うまでもないことである。

さいわい松丘は、その名の示す通り、地形がうねうねと続く丘陵の、自生アカ松林の頂点部分を残して、なだらかな斜面を切り開いて造成された場所である。丘の上から眺めれば、その視野いっぱい、山あり海あり市街地ありで、それに周囲に多種多様な樹木が茂っていて、決して辺境とは言い難い位置を示している。

ハンセン病の療養所と言えば、全国的に見ても十三ヶ所あるうち、ほとんどは人里はなれた辺鄙な場所や離れ小島だつたりで、決して生活に便利な土地柄とは言えない。

そういう点では、市街地とも近く、新幹線の駅が

近いうえに、私たちは緑の豊富な自然に囲まれた生活をエンジョイしている訳で、有り難く思わなければなるまい。

あれは昭和五十年代の初め頃では、なかったかと思うのだが、テレビ放送で昭和七年に石江地区を撮影した八ミリの秘蔵フィルムが、紹介された事がある。石江小学校の運動会風景や盆踊りなどのほかに、国道から別れて、松丘保養園に至る道の両側の、さくら並木が紹介され、その説明に、収容患者の生活する建物が、国道を通る一般の人々の、目に届かぬように、わざとジグザグに折り曲げて道路が造られ、そして、目隠しにさくらの樹を植えたものだという事だった。

その説明を聞いて私は、成るほどと合点するものがあった。私が収容されたのは、昭和十二年の秋のこと、郡山駅から始発に乗って来たのに、青森駅に着いたのは午後八時頃で、迎えにきた客馬車に乗せられ、暗い夜道を堤灯で照らしながら、保養園の入り口に差し掛かると、道の両側のさくらの枝が交差して、客馬車の窓や天井をこすりつけ、まるで樹海の中にもぐり込んでゆくような、不安に駆られたも

のだった。

昭和三十年代にプロミンの成果によって、「労務外出」という、患者たちが園外に働きに行くのが、流行りだしてからは、成し崩しに解除されていったが、それまでは、有毒地帯・無毒地帯即ち患者の住む地区と、職員の官舎地区が、開設以来厳しく分けられていたから、患者たちは無毒地帯に、例えば花見時でも、さくらの花が咲いたからと言って、一歩でも踏み込むことは許されなかった。

さくらの大部分の樹は、無毒地帯の官舎側の広い区域を、緩衝地帯とするため、植えられたものであつて、患者たちのためのもでは無かつたのである。その証拠に毎年春の「観桜会」の催しは、丘の上のグラウンドの周囲に、数本あるだけの樹の下で行われてきた。

樹木医の方が、最も関心を示したのは、三内霊園の北側に面する沼岸一帯、すなわち今の文化センター前あたりまでの、さくらの樹勢の良いことであつたように思う。あのさくらたちは、皇紀二千六百年を記念して、昭和十五年の春に、患者たちの手によって植樹されたものだが、さくらばかり



でなく、他の杉や松の木なども、公園の森に補植されたのだった。

私のいちばん愛着のあるさくらは、何と云っても、今の第一センター「寿寮」の東側玄関前の、土手際に生えている老大木だ。なぜならこの樹は、昭和十三年四月に、初めて少年舎の若竹寮と少女舎の若草寮が、開設されたとき、その二つの建物の間を地均らしをして、子供たちの運動場を造ってくれた。そのグラウンドの両端に一本ずつ植えられた、東側の樹が今に残って、大樹となったものであるが、私たちが小学校の授業が終わって外に出ると、雨の降るなかを蓑笠つけて土を掘り、健康室の工藤勇さんという人が、作業に出されて、人間の背丈ほどのさくらの苗樹を植えて、支柱の副木に結びつけていたのを、今も鮮明に覚えているからだ。

あれから幾星霜を重ねて、さくらは、何時しか巨木と言われるまでに成長し、なかなか見栄えのある枝をひろげて、毎年見事な花を咲かせてくれている。建物が更新するたびに十数回も居室の移動を繰り返し、平成十年に元の若竹寮の跡に建てられた現在の「寿寮」の、住人になって早十六年、私は居なが

らにして、少年時代を懐かしみながら、さくらの花と会話するのである。

少年舎時代いっしょに暮した仲間たちは、結核を病み若くして世を去った幾人かのほかに、戦後北朝鮮に引揚げたまま消息を絶ったイ・スマン君、自衛隊に入り飛行機のパイロットになった力男君など、異色の道を歩んだ人々が、巣立ってゆくのを、このさくらの樹は見送っている筈だ。

昭和十年に大阪大水害で、流された外島保養院の患者五十名が、この松丘にも避難して来たとき、付き添って来た男の職員が、青森のさくらの余りにも見事さに感嘆して、新しく建設される邑久光明園に、百五十本のさくらの苗木を自費で買い求め送ったという事が、古い「甲田の裾」にも載っている。ついでだが、避難して来た外島の病友たちは、昭和十一年の松丘大火にも遭い、また北国の寒さに耐え兼ねて、他園に逃走して行く者が相次ぎ、昭和十三年春に、光明園に帰って行く時は、五十名が二十名に減っていた。

その二十名の病友たちが帰ってから、「松丘の人々に大変お世話になったから」と牡丹の苗木二十本ほ

ど送つて来た。その苗木は当時の園内の中央にあった、日赤図書館の前庭に植えられ、毎年巨大な大輪の花を咲かせてくれた。その苗木は色とりどりの新種を接ぎ木したもので、この界限では、とても珍しがられ、大切に管理されていたが、寮舎の更改新築のたびに、あちこちに分散して移され、今は個人の花壇などで、見掛ける位になつてしまつた。

園内の樹木で忘れられないのは、丘のグラウンドと楓林寺の間の斜面に植えられた「かえで公園」のかえでの樹ではあるまいか。これは言うまでもなく、貞明皇太后さまが、お住まいの大宮御所のお庭の、かえで樹の実生を、お自らお拾いになられて、全国の療養所の患者を慰めるために「夏は青葉の陰に憩い、秋は紅葉を賞でよ」との御言葉添えて、ご下賜になつたものである。今では立派な成木となつて、秋を彩る真紅な紅葉は、他に見られない美しさだ。私が入園した頃は、「恩賜寮」が建つ前の敷地の片隅の、藪で開つた苗木の中で育てられていた。苗はまだ四、五十センチ位だった。

私の部屋の室長の三浦弥助さんが、苗木の管理を任されていたので、私も一緒に苗木の見回りに連れ

て行かれ、苗の間の雑草抜きなど、手伝つたりもしたのが、昨日の事のように思い出される。

その苗木が現在の場所に、本植えされたのは、昭和十三年の春と記憶している。公園の清掃係りだつた、佐々木さんと大久保さんの二人が、鍬を振るつて、植え込んでいたあの小さな苗木が、こんなに立派な成木になるなんて、誰が想像しただろうか。かえでは毎年真紅くなる訳ではないようだ。夏の日照りが強い反面、秋の冷え込みがづくと、期待通りの紅葉になるような気がする。だからその年の気象状況によつて、左右されることは確かなようだ。

弥広神社脇には、かえでの苗木を御下賜になつた当時の貞明皇后様のお歌

つれづれの友となりても慰めよ

ゆくこと難きわれにかわりて

と刻んだ御歌碑は、秋田県男鹿半島の寒風山から運んできた石で建てられたもので、当時のご時世とは言え、たいへんな苦勞を惜しまなかつたものである。秋田県出身の人は、これを知つたら、ふるさと産の石が、御歌碑として使われていると知つたら、特別な思いに駆られるのではないだろうか。

ちなみに、この松丘の御下賜になった、美しい紅葉樹かえでのルートについて、考えてみたのだが、日清戦争のあとで、日本の領土となった台湾の、初代総督となられた北白河宮様が、台湾の最高峰新高山（蔚山）に登られたとき、頂上辺の紅葉の余りの美しさに惚れこんで、その苗木を東京のご実家である、北白河宮邸に送った、という記録を読んだ記憶があるが、そこで私の推理が働くのであるが、貞明皇后様は北白河宮家から出られた方であるからして、ご実家の庭のかえでを、大宮御所のお庭に移植された事は充分に考えられる。と、すれば台湾の最高峰蔚山のかえでが、日本最北端の療養所のかえでと、係脈が結ばれている訳で、秋季のかえでの美しさを、ただ単純に綺麗だなーと見とれるよりも、そうした繋がりについても考えて鑑賞してみたら、いつそう興味も沸いてくると言うものではないだろうか。

初代の院長 中條資俊先生は、（ほんとうは三代目なのだが、前任者は一代目も二代目も、青森県の衛生部長の兼任だったから、私たちは中條先生が専任の初代と思っている）とても植物に関心が深く、とくに樹木の事になると仲々のものだった。

誰かが公園の若樹を野菜畑の手柴に使いたくて、伐ったのが見つかったとき、大変なご立腹で「お前の体の手や足が斬られたら痛いだろうに、木もそれと同じなんだぞ」と、叱られたという話は有名だった。

私が入園してからも、火葬場の土手の上の松の木が、大根畑に陽が当たるのを邪魔しているからと言って、農園室の患者が、数本伐り倒したのが見つかって、中條院長の知るところとなり、富田主事（今の事務長にあたる）を遣わして、お叱りを受けた上に、始末書まで書かされたのだった。

中條院長がドイツに留学されて、日本に帰国されるとき、沢山の樹木の苗木をお土産に持って帰られた。私の知っているだけでも、ドイツトウヒ、イタヤかえで、プラタナスなど療舎の前庭に植えられていたが、それら患者地区のほとんどが、療舎の建て替えのたび伐られてしまい、今は跡形もないが、旧事務本館脇に植えたドイツトウヒや、モミの木などは今でも健在で、職員の駐車場の側に、こんもりとした一角をなし、天を突く巨木となつて、園の歴史を語るがに枝をひろげている。

私の住む「寿寮」から、朝夕眺められる、西南の方角一帯の丘に、カラマツの並木が続く。今では二、三十米の高さまで伸びきって、貴重な防風林の役目を果たしているが、昔はここで三月になると毎年、堅雪を踏んで、各室競争の凧あげ大会が、催されたものだが、その頃のカラマツの樹は、まだ植えられたばかりで、人間の背丈より少し高いくらいの若木だったのに、何時の間にか空を突く、大きな樹になってしまったものだ。

この並木は園内と園外を区別する、高い境界線の、土堤の内側に植えられたものだが、土堤は一段と高く築かれていて、患者たちは、その土堤の上を踏み慣らして細い道路にしまった。朝食前と夕食後の二回に亘って、自力で歩ける患者は皆、散歩に出かけるのだ。今と違って長裾の患者着すがたの男女が、五十人、百人とまとまって歩くのだから、それは壮観というか、今思い出しても異様な集団の行列であった。

その土堤の上から一步でも外に出る事を許されなかった時代は、限界ぎりぎりの、外界の空気を吸いたいという、患者たちの願望がそうさせたのかも知

れない。

この習慣は随分と古い時期から、行われていたというが、戦争で極度な食料難に追い込まれると、患者作業の強化と言う事もあって、朝の散歩どころではなくなり、そういう習慣は途絶えても、カラマツはずんずんと成長をつづけ、青森が艦載機の空襲を受けたときは、私はこの並木の下に潜んで、青函連絡船が次々と沈められてゆく、むつ湾の壮絶な状況を眼の当たりにした記憶が、この樹たちを観るたびに鮮やかに蘇ってくるのである。

松丘には創立百四年もの歳月をかけて、培われた多種多様な品種の樹木が、たくさんある。これらの樹木の、特に珍しい品種の幹に、木の名前を書いた札をとり付けたりしたら、森の中に遊びに来る、地元の子どもの達の自然観賞にも役立つのでは、などと考えてみたりする。豊富な緑に包まれた環境のなかで、身近な樹木たちと会話でもしたくなるような、長い付き合いだった、私の人生は、松丘の一木一草によつて支えられてきたのかも知れない。

## 記憶をたどつて

一九六三年五月、ここ松丘保養園の生活や作業に馴れた頃、書道の通信教育を学ぶグループがあることを知り、私もその一員に加えていただくことになりました。

文字を書くことの難しさや楽しさを教わるキツカケです。私の書く字は右肩上がりの悪筆で自分でも読めないほどひどいものだったので、人並みの文字を書きたい一念だったように思います。

『永字八方』という基礎や楷書を初心者は学びます。力を入れる、抜く、点、撥ねる、ひとつひとつが不自由な右手ではプレッシャーそのものですが、筆運びのポイントを練習するしかありません。自分の書いた文字が採点されて冊子に発表され、昇級する人は丸印が付き、写真となって発表されるのです。たとえようない満足感は偉くなったような錯覚を味わったものでした。級から段が見え

## 木村伯龍

る頃に壁に突き当たり限界も見えて参りました。

この頃は、園外に働く為に出る人も多く、私もその一人で時間のやりくりが大変だった事情も加わり卒業することにしたのです。

書くことは好きなことなので、ペン字やデザイン文字に興味向き、レタリングを学ぶことになるのです。基本科の六ヶ月でしたが、後々の生活に影響することになります。この通信教育には応用コースと専門科に進む方はプロとして生活できる保証がされるほど仕事の幅の広い世界なのです。

魅力のある仕事ながら、趣味として学ぶことにしたのは、体を動かすことが好きなことや、運転することを生活の中心に考えていたのです。趣味であってもサイドビジネスも考えられましたが、そのレベルにはほど遠いことも事実でした。技術よりも感性が大事なことです。

治りそうで治らない傷を抱え、指は少しずつ短くなるし、ただただ保護するだけの生活に我慢出来ない折りに、偶然看板屋との出会いがありました。看板材料の配達の即戦力を求めており、翌日から東京郊外の三多摩地区の同業社に材料の配達が始まりました。

地図が頼りでしたが、サポートもしっかりして会社というより家族のような雰囲気につくりましたものです。材料の間屋ながら、製作部門もあり、その現場にも応援として手伝うようになり、多少でも基礎があつたのが幸いし、製作現場にいる時間も増えて参りました。

「ミシン」という機械は右手の不自由な私には取り扱いにくい構造ながら、工夫しているのを見て見ないふりには感謝するばかりでした。受け取り方でしょうが、黙って見ていてくれる気持ちに応えられる仕事で返せるように機械の担当をお願いしたほどでした。

半透明のプラスチック板を折り曲げて箱状にして、内側には蛍光灯を取り付けます。建物の壁に取り付けるか、スタンドにするかの違いこそあれ、文

字を貼ることで一応の完成ですが、やはりそこにはその会社の個性があるのです。アフターサービスこそ、この会社の目玉で、次もまた声を掛けてもらえるようとの配慮でした。数人のメンバーながら残業も当然のように取り組んでおりました。社長もいいタイミングで一升瓶を持ち込んで労をねぎらう人で、早仕舞いして焼き肉屋に連れ出すキツプの良さにいい職人も揃ったように感じたものです。私のような新人でもその気にさせてくださり、これからと言う時に突然にある事情と言うだけで会社は合併されることになり、仲間の大半は退職すると言う。短い期間ながら、良い夢を見させていたいた二年でした。

当時私は立川市に下宿していたこともあり、近くの職場を探して地方版の募集欄に新車の陸送の仕事が目につきました。

本社は神奈川県ながら、出張所が昭和基地であり、米軍の飛行場としての役割も終え、その頃は日産系の会社の生産地になっており、川崎と横浜の港から全国に送るための下請会社が数社ありました。バラック建ての粗末な作りで事務所とは名ばかり



です。大丈夫かなとの第一印象でした。

日中のグルーブは三回ほど港に運び、帰りはバスや列車を使って帰るだけのことなので、家庭の主婦もアルバイトで来る方もおり、二十名はいるようでした。夜間のみ働く人は、帰りはマイクロバスが付きまでするので、五回は往復するため少し慣れた人か、技術のある人が選抜されます。一度信用されると昇給できるシステムもあり、本社経由やプールに移動する車種を屈ける仕事もあるのです。

県外にも届ける仕事は必ずベテランが付き、一泊や二泊など、中古車の陸送もありました。

一年も過ぎるころには一人で北海道へ引っ越しする車を届け、八戸から引き取り仙台へ、本社にしかない五台を一度に運べる「キャリアカー」に乗せてもらい帰るようにもなっていました。そこ村山工場は当時、ケンとメリーのスカイラインを作っていたこともあり五台のキャリアカーの導入が決まり、私もメンバーとなり大型免許を取らせていただきました。

静岡県の浜松の工場に引き取りに行き、帰る折りの恐怖は今でも忘れることはありません。

高速道路を使って帰るのではなく、箱根マラソンのあのコースを通って戻って来たのです。他のメンバーも冷や汗で無我夢中だったと笑えない経験でした。そしてトラブルもなく約一年勤めたことは、満足感そのものでした。

若さもあり、無理もできる、いい巡り会いでしたが、今度は手袋のように腫れあがった手を隠せるはずもなく、職場を離れるしかなかったのです。

仲間との交流はそれでも続いたものの自然と年賀のやりとりもなくなり、当時の一喜一憂が思い起こされます。宿命ならそれもよし。後を引きずらないようにするしかありません。生きていくかぎり、どこにいても新しい出会いはあります。私も結婚することが出来たし、秋田で十九年勤続したこともあります。そして今、これからも新しい出会いがあるでしょう。私は学校で勉強することは出来ませんが、生活をするための職場で友達を作ること、出来たように思っています。知識より智慧を生かすことこそ大切なことのように思っております。

# 短歌

## 白樺短歌会

雪の間に咲く

滝田 十和男

いちはやく雪の間に咲くクロッカスの紫色は春のそのもの  
白鷺の羽根を広げて舞ひ降りる雪解水のそそぐ沼地に  
両掌もてブラシを押さえ歯を磨く鏡の前の朝のわが顔  
老齡の避けて通れぬ腰痛を宥めつつ行く亡友見送りに  
老いゆくは人さまざまの道程をたどりて至るものと知りつつ  
今朝もまた少し温めぬるのコーヒーのカップを卓に我れはしあわせ  
独り居の部屋の長押ながしに掛けもらふ故郷の桜を写したる額  
北極の万年雪の解けすすむテレビの画面おろそかならず  
温暖化すすむ地球の行く末もわれの老化もとどめ難しも

黙すよりほかなき時代に還りくる恐れもち聞く秘密保持法

右傾化の声きくからに戦争の痛み苦しみ忘れたるがに

塔和子・村越化石あひつぎて訃報の届く春待つ園に

炊事夫の定年となりて別れゆく萎えしわが掌に握手もとめて

春芽立つ季節の別れ定年を迎へし人らに花束あつまる

起き臥しの日日を看護りてくだされし人ら見送る涙隠して

人生の半ばのすべて我らがため尽くして去るはまこと尊し

居ながらに新幹線の往くが見ゆオレンジ色の車体帯なして

葉の落ちし林を透かし束の間の新幹線は季節限定

沼岸を隔てし藪の鶯の初音をこころ弾ませて聴く

待ち待ちし春の訪れ確かなる声ひびかせて鶯は鳴く

長冬の終わりを告げて土手に咲くタンポポの黄の眼には親しく

## 再出発原点

三浦 喜美子

両親が年と共に農作業が思う様に出来なくなり、兄夫婦に頼まれ、秋（九月下旬〜十月一杯）に手伝いに行くようになって六年目の年でした。

此の年は好天氣に恵まれ農作業も早く終わりました。毎年帰園する前に町に出て、必要な物を買っていたのですが、此の年も出かけようとした所、兄に洋品店に寄って頼んでいた服を貰って来てと頼まれました。帰り際に寄ったところ、直ぐ渡して呉れると思いきや、お茶を出して頂き驚きました。肌寒い日でもあり、暖かいお茶を有り難く頂戴しました。

帰園して間もなく母から手紙が来ました。其の洋品店の長男の嫁にと、三人で私を貰いに来たというのです。驚いた祖母、母。すると父は、

「あの子は嫁いで居り帰りました。寒い所、来て頂き申し訳ありません」

と何度も頭を下げていたとの事。当時の様子が目に

見える様でした。

其の時私は大変嬉しかったです。もしかして退園出来るかも知れない、先生に相談してみようとふと思いました。其の思いが実家の皆と一致して、父からの便りでは

「来春でも退園できるか否か、先生に相談してみる様に。退園出来たら実家に来い。家族会議で決めた事だから何も心配はいらないから、其の後の事は退園して来てから話す積りだが、分家するつもりだ。」  
私は驚いた。分家して貰うとは夢、夢、考えた事もなかったのです。

四月に入ってから私は主治医に相談に行きました。そうしたら今、先生は出張中との事。一大決心をして行つたのに、出鼻をくじかれた様で力が抜けてしまいました。

そうこうして居る中、櫻の花が咲き始めました。

長かった冬。一気に各花が咲き始め、園の行事で観  
桜会が行われました。

皆、行李から晴れ着を出し、着飾って会館へと向  
かうのです。その嬉しそうな顔、顔。其の後は各県  
人会の花見、各職場の花見、友人同志の花見、各寮  
の花見、当時は花見、花見、一色でした。

公園で夜桜会が開かれたこともありました。当時  
は皆、若さ一杯、二晩の夜桜見物もこれ又、大変な  
賑やかさ、酒はつきもの無礼講で楽しみました。

ある年の観桜会で、演劇に出て呉れないかと話が  
ありました。私は驚きつつも承知しました。それが  
老父の役との事で二度驚きました。当時私は三十二  
才、なぜ私なのか不安で一杯でした。

その劇とは…

ある田舎の農家の主人は妻を亡くし、一人娘は家  
出し東京に行った。数年後娘が突然帰って来た場面  
で、縁側で話し合う所です。老父は薄汚れた手拭い  
ではち巻、ボロの着物を着、ステテコを履き、タバ  
コのキセルをくわえての事、娘は赤い服、眞赤な口  
紅、パーマをかけた長い髪、上衣は袖も通さず肩に  
かけ、誰が見ても水商売風、村人達は驚き、さわぎ

噂話となりま  
した。老父は  
なぜ今頃に  
なつてそんな  
格好で帰った、  
恥知らずと怒  
るのです。

リハーサル  
の時、タバコは  
吸ったふりでも  
よいと言われ  
ました。私  
は一度も吸つ  
た事がなかつ  
た為でした。

当日私はほんとうに思いきり吸った、煙が立ち上  
がり、むせぶ事はなかったが、むせんだふりをしま  
した。すると客席からどつと笑い声が上がった。嬉  
しかった。あんまりしんとした場面で一瞬淋しいと  
思った私が急に思いついたのです。指導者に怒られ  
ると思いきや、よくやったと、褒められました。娘



演劇の一角・右端が筆者。

役をやった方は私より少し年上ですが今でも健在です。

退園の事を忘れたわけではなかったのですが、花に酔っていました。

そんな中、「父キトク スグカエレ」の一報が入りました。我に返り戸惑つて居る所に、今度は、「父シス、スグコイ」との一報。動く事が出来ませんでした。だが、気を取り戻し、次の日の一番列車で帰りました。

お通夜、告別式も済み、姉妹達とゆつくり話す事もなく、田植を目前に控えて忙しく帰って行きました。急に母が熱を出し、兄夫婦も忙しい為、私が面倒を見ることになったのです。田植も終わり、母も元気になったので帰園することになりました。兄は、「大変お世話になった。ほんとうに助かった。有難う、気を付けて帰る様に」との事。もつと大事な言葉を聞いたかかったのですが、それは無かったのです。父の死と共に私の居場所も無くなったのです。そんな事は父の死後すぐ感じて居ました。又帰る積もりは、毛頭なかったのです。お世辞でも、何時でも

帰って来いと言う事の出来ない兄なのです。

此の年、長女の姪は高校卒業後、家の手伝いをし居ました。甥は高校生と中学生になつて居ました。そんな中、私が退園して帰ったら、姪や甥達にキズがつくのを見が一番恐れたのです。兄が一言いったら、私が帰つて来ると思つたのか、全く正直な故に、アホな兄なのです。

帰園すると、「待つていた」と、ある御夫婦より結婚話がありました。その人は四年前全生園を退園し東京で働いて居ること事でした。写真も見たこともないのに、私には帰る所がない身、此の話を受ける事にして文通が始まりました。

八月に入つて彼が其の夫婦の所にやつて来て、其の時結婚の約束をしました。夜行列車で来て、又夜行列車で帰って行きました。待ちに待つた退園の許可も出ました。退園は実家に帰らず、上京する積もりでした。私にも意地があつたのです。

驚いた母、兄からは先ず退園は実家に来てから上京する様、再三手紙が来ましたが無視しました。すると母が退園の日程を決めてきて、「迎えには前日に次女が行く、盛岡の病院で手術する義弟を見舞つて

来る様に。兄は其の病院に行つて居る為、お前を迎える事が出来ないのでよろしく」との事。父の死後、母の強くなつたのには驚き、嬉しくも感じました。

此の年も農作業を手伝つてから上京しました。母も兄も、何んでも欲しい物は持つて行く様に言つて呉れました。お米、味噌、漬物等、沢山送つて貰いました。又上等ではないが着物も一揃い作つて呉れました。嬉しかった、本当に有難かったです。

私が上京して四ヶ月が過ぎた頃、母から手紙が来ました。

「あの洋品店に従姉妹（母の姉の娘）が嫁ぐことになった。結婚式の招待状が来て初めて知り驚いた。世の中広い様で狭いものだ、後で知るよと思ひ、今知らせた。又洋品店の方に顔を知られてない義姉を結婚式に出席して貰う事にした」と。

従姉妹が嫁ぐとなれば私の心は穏やかでは無く、何かしらこみ上げて来ました。悪病になつた自分の身が情けなく、悔しさ一杯でした。

従姉妹におめでとうの言葉を伝える手紙を母に書く事が出来ない私がそこに居ました。

心の狭い私もそこに居ました。

其の母も父の死後一年三ヶ月で後を追う様に去つてしまいました。もつと母の強い姿を見たかつた、残念でした。

母の告別式後、おじ（母の兄）がお礼の言葉としてあいさつをしました。「妹（母）は腰が曲がり本人が一番辛かつたが、家族が温かく見守つて呉れて有難う御座いました。特に三女には良くして貰つたと遊びに来る度に言つて居た」と、私に向かつて言つたのです。驚いた私は涙を流しながら一礼したのを今でも覚えています。

母は実家には良く遊びに行つていて、子供の頃私も一緒に行つた思い出が残っています。

ある年、私が実家に帰つていた時、母の実家より遊びに来る様との事で自転車で行きました。母の両親は無くなつて居ましたが、おじ夫婦が温かく迎えて呉れたのが嬉しくて忘れられない思い出です。

あれから五十五年の月日が経ちました。当時の樂しかつた、嬉しかつた、悲しかつた、数々の思い出が消えては浮かび…人生の終着駅に近づいて来て居るのでしようか…。

## ☆松丘のニューフェイス☆

二月から当園で働く新人の方々の紹介です。  
どうぞよろしく願います。

(アイウエオ順)

### ①勤務場所

### ②これからの抱負



江畑由樹子 (えはた ゆきこ)

① 中央センター1階 看護助手

② はじめまして。まだまだ覚える事がたくさんありませんが、慣れたため色々とお迷惑をおかけすると思いますが、精一杯頑張ります。よろしく願います。



大科みどり (おおしな みどり)

① 中央センター1階 看護助手

② 二月十日からお世話になっている大科です。松丘の仕事に早く慣れ、入所者の方が安心できる介護をしていきたいと思っています。がんばりますので、よろしく願います。



小山内絵巳 (おさない えみ)

① 病棟 看護師

② 四月から病棟に配属になりました小山内です。まだ不安や緊張の毎日ですが、日々精進し、患者様、入所者様の事を第一に考え、笑顔を忘れずに行きたいと思っています。宜しく願います。





① 福祉室 看護助手  
角田素子（かくた もとこ）

② 福祉室に勤務している、角田です。右も左もわからず、毎日があつという間に過ぎていきます。園のことを学びながら、慣れていききたいと思っています。よろしくお願いたします。



① 第二センター 看護助手  
川原田 忍（かわはらだ しのぶ）

② 四月一日より第二センターに配属になりました川原田忍と申します。看護助手で採用になりました。まだまだわからない事ばかりです。先輩の方々に一生懸命学び頑張ります。お願いたします。



① 縫工部 看護助手  
関 美雪（せき みゆき）

② 縫工部に勤務になりました関美雪です。まだまだ不慣れですが、少しずつ新しい事にチャレンジし楽しい毎日を過ごしています。見掛けた際は是非声を掛けてくださいね。よろしくお願いたします。



① 中央センター2階 看護助手  
平山郁郎（ひらやま いくろう）

② 看護助手という職種は初めてですが、精一杯やりますので、皆様のご指導をよろしくお願いたします。

# 川柳・俳句

木村伯龍

## 川柳

ここえる手 早々切り上げ 露天風呂

足腰の 痛みに耐えて 万歩計

岩風呂が 夕日をあびて 日本海

うすあかり 多少早い散歩道

優しさと きびしさ秘めて ナースさん

## 俳句

ブル走る 滑るその跡 要注意

融雪路 歩幅気にせず 散歩道

歳の暮れ 鯛も焼いて 笑顔あり

願いごと ひとつふたつ 初詣

夜明まえ 雪みち淡く 息荒く

野の花の微笑<sup>ほほえ</sup>み

比良信治

(9) 函館の一日

文太郎と恵子は、夜が明けるのも忘れて話しあつた。

文太郎にとって恵子は、少し年上であるが、年齢に關係なく好きだつた。明るくて、柔らかくて、顔もえくぼが愛らしく。肌合いが合うので好きだつた。つきあいは短い、一緒に旅に出て、彼女の何事も手際よく処理することも知り、障害を持つた人とは思えなかつた。長い間、父と母と暮らしてきて、将来彼女と共に暮らしていつても不安がないと思うようになっていた。

しかし、結婚の話になると、彼女は両眼をつるようにして、「だめ！その話はだめよ」と言つてきかなかつた。

私は、病氣持ちの烙印を押された者でしょう。しかも身体障害者であり、結婚もした女ですよ。あなたのように将来のある男の女房にはふさわしくはない。もつとわたしより立派な娘さんがいるんじゃないですか。わたしはあなたが好きよ、だからいつでもあなたを受け入れることはできますよ。でも結婚はあきらめるわ、と恵子は

繰り返した。でも文太郎はあきらめてはいなかつた。

そんなやりとりを繰り返して時が過ぎた。

そして、彼女が保母養成学校に入學して、卒業したら、文太郎は迎えに来ると言うのと、彼女の心が少し傾いて、資格がとれたらどこでも働けると聞いて、文太郎の住む町の保育所に行きたいと言ひ出した。文太郎は、小樽は保育所が各地に昔からある町で、住まいと近い所を見つけるといふと、彼女の心が明るくなつて、文太郎の両手を握りしめてきた。彼女は文太郎と一緒にいたいのであるが、はつきりと言ひきれないのである。

窓の外が明るくなり、二人は、それぞれの部屋にもどつて朝を迎えた。

二人は恵子の姉に起こされた。恵子はその日の昼頃の船で、青森へ帰ることになつていた。文太郎は彼女を函館棧橋で見送つて、汽車に乗つて小樽へ帰ることが決まつていた。

眠い目をこすり、二人は朝食をとった。軽い食事が終わると、恵子が文太郎の顔を見つめた。

「船に乗る前に行きたい所があるの。一緒にしてくれない？」

「ぼくも行きたい所があるの。どこだと思う？」

「あらー、同じことを考えていたのね…」と、彼女は笑った。

「ここから近い所にカトリック元町教会があるの。神様にご報告してお祈りしたいのよ。一緒に行ってくださる？」

「いいともさ。ぼくは少し遠い所だが、立待岬に行ってみたいのさ。タクシーで走れば船には大丈夫間に合うと思うよ」

二人は急いで帰り支度をして、姉夫婦にお礼を述べて外に出た。タクシーが通りかかったので飛び乗った。

「近い所ですみませんが、ガンガン寺までお願いします」  
白髪の混じった老運転手が、心よい返事をして走り出

した。表の瓦葺きの家は珍しいと思つて文太郎は眺めた。「この元質屋さんとあなた方は関係があるんですか？」

と、陽に焼けた運転手が尋ねた。

「ありませんのよ。この裏側に姉夫婦が住んでいるんで、厄介になつたんですよ」

「明治からの質屋さんですからね。有名な石川啄木一家も何回もお世話になつたというのでも知られてしまつてね」

「あら、おじさん、よく存じてー」

「啄木ファンでしてね。啄木会にはたまに出て勉強しているんですよ。商売にもかかわりませんからね。」と、言っている間に、町の人というガンガン寺という、カトリック元町教会に着いた。

お金を払つて外に出た時に、文太郎は聞いた。

「おじさん、この後に立待岬の啄木の碑に行きたいのですが、ほんの少し待つてくださる？」と聞いた。

「待つていますよ。ゆっくり行つてらっしゃい。貸切観光タクシーとして安くしておきますよ」と、笑顔の中に白い歯並を見せた。人の良さそうな人だと思つた。向かいには東本願寺別院があり、その坂の上に聖ヨハネ教会があり、その向かい側に、同じようにガンガン寺と言われるロシア聖教のハリスト正教会が見えた。

元町教会は明治元年に生まれており、外人神父の司祭館が函館戦争の時には、敵味方の戦病者を介護した野戦病院として役立てられた歴史が残っている。赤十字病院の役割を果たしたとも言われる。今の建物は、明治の函館大火後の大正十三年に竣工したものであると

いう。大きな聖堂の脇には、その三倍もある尖塔が建つて時の鐘を告げるのである。

靴を脱いでスリッパに履き替えて聖堂に入ると、その高い天井と正面にある荘嚴なイエス・キリストの祭壇に、文太郎は驚いた。黄金色のきらびやかな祭壇は、ヨーロッパの国々の教会を訪れたと同じように、ひとくちで言うると金ピカの大祭壇であつた。恵子が言うには、函館大火後の大正十年の再建のときに、時のローマ法王ベネディクト15世より贈られた、イタリヤのチロル地方の木彫祭壇であつた。堂内にはラテン語による合唱曲がよどみなく流れていた。

両側の白い壁には、金色の額縁にイエス・キリストが磔になつて行く受難の油絵が飾られていた。

広い聖堂の中頃に一人の婦人が祈つておられた。恵子は、入口の献金箱に入金して十字をきつて頭を下げた。中へ進んで椅子に腰を下ろして両手を合わせて眼を閉じてお祈りをした。文太郎も見よう見まねで十字をきつて両手を合わせて頭をたれた。恵子は昨夜の文太郎とのいきさつを神様に報告し、これから保母の資格をとつて、文太郎と結婚できるように、神様のお恵みを与えてくださいますようにお祈りした。

文太郎は、昨夜の恵子と話し合つたことを神様に報

告し、二人の前途を祝福して下さるように、神様のあたたいお導きをお祈りした。

待つているタクシーが気になつて立ち上がると、前方の和服姿の老婦人も立つて歩き出してきた。入口で一緒になると、恵子が声をかけた。

「この教会の方ですか？」

「以前はそうでしたが、今は奥地のS町におりまして、久しぶりに里帰りしましたのでお祈りにきたんですよ」と、笑顔をみせて語つた。

「私達は、旅の者ですが、立派な教会ですな」と、文太郎が口添えした。そこへ、どやどやと、四、五人の若い男女が入つてきた。観光客だとわかつた。

「ここは靴を脱ぐんだぜ、やめるか？」

と先頭の坊主刈りの男が言うと、

「函館戦争の時に出来た歴史的教会だぞ、おがんで行こうよ」と、仲間頭の男が言うと、一行はぞろぞろとスリッパをはいて入室していった。

和服姿の老婆が文太郎に微笑んで、お辞儀をして先に出た。運転手が車の前に立つて迎えた。

「まだ十二時迄は二時間半ありますから、岬へは十分時間がありますよ。上田と申します。」

「いやあ、お願いします。よろしく。」

二人が乗車すると、車は登ってきた坂を降りて、朝来た弁天末広通りに出て、五島軒の前を通り、元質屋の前を通って右へ曲がり、函館公園へ向かった。

函館公園の中には、市立函館図書館があり、博物館や動物園もあった。かつて図書館には、二、三回訪れているので広い公園内は大体、文太郎も知っていた。しかし、啄木の歌碑が公園入口にあるのは一度見たが場所はわからなかった。

上田運転手は、時間があるから見て行きましようとう車を止めて下さった。

公園入口の挿鉢山の下にあった。二層近い黒い石版に、啄木の書で書かれた短歌が刻まれていた。

「函館の青柳町こそかなしけれ

友の恋歌矢ぐるまの花 啄木」

石川啄木が初めて函館に来た時は二十二歳で、明治四十年五月五日であった。文芸社の苜蓿社の編集人として来道した。この青柳町に同人の多くの仲間が住み、編集所もあって、啄木も妻子を呼んで住んだ所である。

上田運転手は一枚の啄木案内図を開いて二人に説明した。この青柳町の歌碑は、観光ガイドに漏れているために余り知られていないのが残念ですと言われた。啄木は盛岡中学生時代に短歌で有名になり、明治三十八年

には処女詩集『あこがれ』を出版し、親友の堀合節子と結婚しているが、二十歳の時である。

「さすが啄木ファンですね。啄木の資料をお持ちなんですね」

「これは、函館啄木会に初めて出た時にいた、たいした資料でしてね。啄木の歌はすてきですし、函館にとつては大事な人ですからね」と、運転席に戻って笑顔で語った。

車はいよいよ緑濃い函館山の麓に入った。右手に大きな谷地頭温泉があった。

「あの谷地頭温泉には東京の学校の往復のときに、しばしば入浴したんだよ」と文太郎が語ると、恵子も続ける。「わたしも度々入ったわ。まっ茶色でね、手拭いが染まるけど、あたたまるので、よく利用しましたわ」

文太郎は夜行列車に乗って朝の六時頃に着いた時は、連絡船に乗る時間を見計らって、市電でかけつけた。温泉に入つて一休みしたことを思い出した。

「わたしらも、今でも朝早起きのときは、ひと風呂浴びるんですよ」と、相づちを打つ。

車は林の中に入り、登って行くと、両側に墓地が見えてくる。住吉墓地だ。墓地のすき間からは海峡に面した住吉港も見え隠れする。まもなく左手に、地藏堂が見えてくる。

「今でも、啄木の命日の四月十三日には、この地藏堂で啄木会や関係者の人々が集まって、啄木追悼の法要をいとなむんですよ」

上田運転手が教えてくれた。

まもなく、立待岬が見えてくる。左手に石段のついたお墓が見える。墓所の前にとまった。

「石川啄木一族の墓」と書いた墓標がある。

一行は車より降りて、お墓に手を合わせてお祈りした。さすが、さわやかな風が、海峽の波に乗って舞い上がってくる。潮騒の音が聞こえてくる。右手に函館山のむき出した岩石の突端が迫り、切り立った断崖を見せている。遠くに青森方面の面影が見える。

運転手の上田さんによると、石川啄木の生涯は短かっただけに、惜しまれるという。

上田さんは上着を脱ぎ、白い半袖シャツの姿で二人にかいつまんで説明した。

石川家は盛岡近くの農村のお寺を経営していたが、檀家も少なくて経営は赤字となって、住職の父は寺の経営をやめさせられた。

啄木は本名を石川一といい、盛岡小学校、盛岡中学校を首席で卒業する程優秀だった。その中学生の頃に既に東京の新詩社を主宰する与謝野寛・晶子夫妻の門人とな

り、みとめられて明治三十八年には処女詩集『あこがれ』を出版する程だった。この年に友人の堀合節子と結婚するが、父が寺を追われて、一家を養わねばならなかった。

「そういう状況の中に、函館の文芸社の首當社の編集人に招かれて渡道するのである。やがて妻や長女を招き、母も渡ってくる。啄木は弥生小学校、函館日日新聞社と勤めるも家計は苦しく、青柳町に住む同人たち、特に家業が味噌醸造業を営む宮崎郁雨（大四郎）の物心両面のお世話を受ける。啄木は短歌から詩へ入り、函館にきてから小説も書き始めるが、中々売れないので、札幌・小樽・釧路と地方新聞の記者として働き、やがて東京の朝日新聞の記者となつて小説を書くも売れず、新短歌をつくり評価をえた。その間に母の肺結核から啄木も同じ病者となつて苦しむ。長男が生まれて間もなく死亡。この後に歌集『一握の砂』を出版。在来の形を破り、一首三行形式で激賞される。

しかし、明治四十五年三月、母が亡くなり、啄木も重体となつて四月十三日、二十七歳で東京で亡くなるのである。しかも、妻の節子も肺結核に悩み、東京から千葉へ移るも最後は函館の青柳町で、啄木に遅れること一年で、大正二年五月五日、啄木が来函した日に二十八歳で亡くなるのである。啄木一族の墓には、両親や節子と子

供三人すべての遺骨が納められている。

表面には、啄木の自筆を拡大して

「東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて蟹とたはむる」と彫られ、裏面には、親友宮崎郁雨宛に送った手紙の一節が彫りこめられている。

その主旨は、啄木は死ぬときは函館で死にたい、ということを書いた一節を彫つてある。この啄木の碑の裏側に、妻節子の実家、堀合家の墓があり、右側には親友宮崎郁雨（大四郎）の墓がある。

墓のまわりには、大小の野花が咲き乱れ、特に岬の突端の方には、赤いハマナスの花が咲き競つていた。

その突端の大きな岩盤の中に、啄木の文才を早くから認めた歌人と謝野寛・晶子夫妻の歌が活字体ではめ込まれている。

「浜菊を郁雨が引きて根に添ふる

立待岬の岩かげの土 寛

「啄木の草稿岡田先生の顔も忘れじ

はこだてのこと 晶子

文太郎も恵子も、初めてみる歌碑であるが、立待岬は石川啄木にまつわる名所となつてゐることを初めて知る。

白いカモメが岬の上に飛び舞い、海峡の左側に砂山がかつてあつた大森浜や日の出海岸から湯の川温泉が

見える。その二人の姿を見た運転手の上田さんは時計を見ながら、二人が見つめた大森浜の方へ指をさして言う。「あの森浜の隣が日の出町の浜、少し行くと湯の川温泉。その日の出町海岸に、この啄木の碑の後に生まれた、啄木小公園のことをご承知かい？ 棧橋へ行く途中だからちよつとも寄つてみましょうよ」

二人は船の出航に間に合うなら車から見ただけでも寄つてみようと思つた。上田運転手はアクセルを踏んで走り出した。

墓地を降りて谷地頭に出て、海岸通りに入ると、スプードが倍近くになつた。大森浜の稲荷神社を過ぎると、さざ波が光つて見えてきた。あつと思う間に日の出町の啄木小公園である。

上田さんが子供の頃には、大森浜から日の出町あたりの海辺は、丘陵地帯のように砂山が続いていたという。その砂山のいたるところに、掘つ立て小屋が並び、汚れた服を着た人々が住んでいたという。この人達は、街のごみ箱をあさつてチリ紙にしたり、くず物を集めて売つたりして生計をたてていたようだ。

戦前に、函館の商人たちが、この人々のために保育所や学校をつくつて、子供の教育に協力し、福祉施設もつくつて救済したが、かの宮崎郁雨こと大四郎もその施設



経営に従事して働いた人だという。

戦後、砂の必要な建築や工事が始まると、たちまち砂山は年々減少し、今のようにならしもして住宅が建ち、浜辺に記念小公園も出来た。その中に、有志によつて石川啄木の座像が安置された。本道出身の彫刻家・本郷新による、椅子に座つて考える啄木の像を造られた。正面座像の下に歌が刻まれている。

「潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜階微よ

今年もさけるや 啄木」

この碑の裏側には、啄木が函館にきた当時の若い詩人たちとのことが刻まれている。この座像が建立されたのが昭和三十三年というが、以来立待岬の啄木の墓について、この小公園も観光コースに入ったのである。

その後詩人の西条八十がここに見えて、啄木に捧げる詩を発表すると、地元有志は再びその詩碑を翌昭和三十四年に建立して、賑わいを大きくしているという。

啄木フアン運動手さんに恵まれて、二人はまたとない啄木夫妻の跡を勉強することができた。思いがけないことであつた。上田運転手は、函館棧橋に着くと、別れ際に二人に名刺を渡した。

「今度おいでの時は、ぜひご連絡ください。ご希望にそつて観光ご案内申し上げます。どうぞよろしくね」

笑顔がまぶしかった。文太郎は感謝をこめて上田さんの日焼けした分厚い手を握つた。

恵子は名刺の住所を見て驚いた。

「おじさんは大町なのね。弥生坂のところね」

「そうですよ。あの坂の中頃にある元町ホテルの隣ですよ。ぜひ声をかけて下さいね」

「こちらこそ、またお願い申し上げますわ」

二人は時計を見つめ、急いで棧橋駅に向かった。連絡船の匂いがしてきた。船を岸壁に寄せ付けるタグボートの汽笛が聞こえた。慌ただしい人々の声や足音も聞こえてきた。

棧橋駅で切符を買ってきた恵子は、あらためて文太郎のそばにより、

「今度は九月の末ですね。お母さんとお待ちしていますわ。体を大事にして下さいね。江差の旅は忘れないわ。あなたに感謝だわ」

「ほくこそ楽しかったし、忘れられない旅だった。恵子さん、園長先生に頼んで勉強して下さいね。あなたこそ体を大事にしてくださいね」

二人は笑顔をほころばせ、両手を重ねて別れの挨拶をして、恵子はタラップをゆつくり登つていった。

(つづく)

自治会日誌

○印 自治会

二月中

3日 不自由者棟 豆まき

6日○岩手県立大学社会福祉学部 田中准教授

外4名来園、石川会長が講演

7日○第8回執行委員会

10日○2/10付採用 大科みどり看護助手、関美雪

看護助手、挨拶に来訪

15日○男 八十四歳逝去 北海道出身

17日○地区連絡係定例集会

20日 歌っこ広場

21日 平成25年度第2回院長協議会北海道東北支部

総会(仙台市)

24日○第9回執行委員会

" ○真宗大谷派 玉井氏 外3名来訪

28日○第10回執行委員会

三月中

7日 国立ハンセン病療養所施設長協議会及び連絡

会議(厚生労働省)

" ○第11回執行委員会

8日○「松丘保養園の将来構想をすすめる会第6回

総会」に執行委員3名出席(於…西部市民セ

ンター)

" ○女 八十三歳逝去 青森県出身

13日○保健科運営委員会

14日○除雪作業員6名 作業終了の挨拶に来訪

17日○地区連絡係定例集会(平成26年度自治会予算

説明)

19日○秋田県ふるさと芸能慰問「土崎港ばやしと漫

談」

20日○第12回執行委員会

" ○東谷商店との売店契約(平成26年度)

27日○新城中学校吹奏楽部演奏会

28日 歌っこ広場

" ○第13回執行委員会

" ○4/1付転出 谷下田事務長 挨拶に来訪

31日○3/31付退職職員5名挨拶に来訪

" ○離任式

## 編集後記

毎年、観桜懇親会を前に行われる「園内クリーン作戦」が近隣町会などの協力で4月16日に行われた。

このクリーン作戦は、当初レクリエーションを兼ねて萱野茶屋や夏泊半島で入園者だけで実施していた。それが今のように地域住民参加で園内で行われるようになったのは、昭和57年6月21日。入園者125名、職員延べ100名余りの計230名が参加して、第1回園内クリーン作戦は実施された。その時「外部からの不法投棄物が多く、今後地域住民に協力を求める必要があると痛感した」という。2回、3回目はどれほどの地域住民の参加があったものか？

それが32回目となる今年は、入園者10数名に対し、地域住民は100名近い参加があった。

先人達の思いが通じ、園内クリーン作戦は、立派な社会交流の役割を果たすまでになったのである。

満開の桜のもと、観桜会で呑んだ酒が美味かったのと言うまでもない。

(編集部 佐藤 勝)

## 人事異動①

【退職】(3月31日付)

内科医師 館山 俊太 (三沢市立三沢病院へ)

調理師長 倉内 義春

介護長 中村 康子

看護助手 佐藤 泰子

看護助手 伊藤 照子 (以上定年退職)

看護助手 大杉 忍

看護助手 工藤 夕湖 (以上任期満了)

【再任用】(4月1日付)

美容師 坂本 さかもと ムツ子

看護助手 竹内 たけうち 美代子

臨床検査技師 大隅 おおすみ 明美

看護師 長内 ながうち 妙子 (以上3月31日付定年退職)

【転出】(4月1日付)

事務長 谷下田 喜代志(八戸病院事務長へ出向)

総看護師長 樋口 あけみ(弘前病院看護部長へ昇任)

人事異動 ②

〔転入〕(4月1日付)

副園長 江谷 勉 (長島愛生園耳鼻咽喉科医長より昇任)

事務長 菅 政彦 (八戸病院事務長より転任)

総看護師長 天内 文子 (八戸病院副総看護師長より昇任)

〔採用〕(4月1日付)

外科医長 清藤 大 (つがる西北五広域連合鯨ヶ沢病院副院長より)

〔定員内職員〕

- 看護助手 田中 (賃金職員より)
- 看護助手 木村 由美子 (賃金職員より)
- 看護助手 葛西 健二 (賃金職員より)
- 看護助手 横濱 明美 (賃金職員より)
- 看護助手 柿崎 敬子 (賃金職員より)
- 看護助手 金澤 礼子 (賃金職員より)

〔昇任〕

調理師長 竹内 佳久 (副調理師長より)

副調理師長 大水 光 (主任調理師より)

〔採用〕(4月1日付)

看護師 小山内 絵巳 (病棟勤務)

〔期間業務職員〕

- 看護助手 石村 敏子 (第一センター)
- 看護助手 川原田 忍 (第2センター)
- 看護助手 江畑 由樹子 (中央センター1階)
- 看護助手 平山 郁郎 (中央センター2階)

〔パート職員〕

看護助手 角田 素子 (福祉室)

平成26年 観桜懇親会 4月25日



東谷商店の出店也大繁盛



消費税は上がっても、今年もラーメン、そば、うどん、百円です。



お昼頃には、会場内も最高潮に!!



今年の桜の満開は4月28日。



# 国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で105年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

## 所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 川西健登

保有敷地 三三〇、五四八平方メートル

(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方メートル

(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方メートル

(一〇、九二〇坪)

## 交通案内

### □電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車

(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車

(車で約5分)

### □バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石

行き 共に松丘保養園前下車

### □航空機の便

青森空港より(車で約30分)

### □高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

### □なお保養園に隣接して桜の名所三

内霊園(1km)と国の特別史蹟指

定の三内丸山縄文遺跡や県立美術

館(2km)等があります。

## 発行所

一般財団法人 松丘保養園慰安会

## 所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017)(788) 〇一四五・〇一四六

発行人 川西健登

編集人 甲田の裾編集委員会

## 印刷所

青森市本町二丁目十一十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017)(775) 一四三一番